

# 「囲炉裏の話」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

一月も中旬となると寒さも一段と厳しくなり、暖を取る火がことのほか恋しくなる。昭和三十年代頃は、まだ囲炉裏や炬たつ等が幅を利かせていた。中でも農家にあつては、囲炉裏が暖房の主役を担っていたのである。

宇都宮あたりで用いられた囲炉裏は、床の部分の口の字形に刻み、ここに火床を設け、屋根梁から自在鍵を下げたものである。昔ながらの農家の母屋の間取りは、広間、座敷、納戸、そして台所からなり、台所は土間作りで傍らには馬屋、勝手、そして板張りの床が設置されるの

が標準タイプである。囲炉裏は、広間と台所の板張りの床の二カ所に設置され、前者を上囲炉裏、後者を下囲炉裏といい、前者は人寄せの時の来客用に、後者は普段の暮らしの中で使われた。

栃木県内に見られた下囲炉裏は、間口よりも奥行きの方が長いものが多かった。間口は三尺強(約九〇センチ)、奥行きが約五尺前後(約一五〇センチ)のものである。ところが宇都宮あたりでは間口が広く奥行きが浅い囲炉裏もあつた。しかも規模が大きく、市内上欠の松本家の囲炉裏は、間口六尺前後(約一八〇センチ)、奥行き七尺前後(約二〇〇センチ)のものであつた。国指定重要文化財の岡本家住宅の下囲炉裏もこの間口の広いタイプであり、鹿沼市上石川の石川家の下囲炉裏も同様のタイプであつた。いずれも大地主で母屋の規模自体が大きい。家族のみならず使用人等多くの人がこの囲炉裏を囲んで暮らしたからであろうか。

囲炉裏は、その形によらずこの家でも家族の座る場所が決められていた。大黒柱を背にした一番奥を横座といい、そこは一家の主の座

る場所である。反対側の土間側は木尻といい、若嫁や使用人の座る所と決まっていた。横座の名は、そこだけ特別に莫座が横に敷いてあつたからで、一方木尻は、薪の燃やし口で木の尻にあたる所からついた名である。そうしたことからよそ者が横座に座ろうものなら「横座に座る者は米買いだ」、つまり横座に座る者は、一家を養う程の技量のある者が座る場所だと戒められたものである。なお、母屋入り口側は、客人ないしは跡取り息子、勝手側は主婦の座る場所であつた。囲炉裏は、かつての封建的な家制度を象徴する場でもあつたのである。

者の美意識が感じられ民芸品として価値高いものもある。

囲炉裏は、暖を取るばかりでなく談笑にふける場ともなり、自在鉤に鍋や鉄瓶を吊るし汁を作ったり湯沸しの場、さらには食事の場となつた。さらに冬の寒さが厳しい時には藁仕事の間にもなり、また、昔話の語りの場ともなつた。囲炉裏は、生活の中心の場であつたのである。

今の家は、昔の茅葺の家に比べると実に過ごしやすい。しかし、囲炉裏のような生活の中心の場としての高い機能を持つた所が無くなつた。家族の絆が弱くなつたといわれる今、囲炉裏に代わる家族の集まる場と、そこに意識的に集まろうとする生活意識の改変が必要と思うのである。



岡本家住宅の  
囲炉裏



上欠町  
松本家の  
囲炉裏